

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50



三七全傳

第三編

右

夢南柯後記卷之八

後序第四

東都

曲亭馬季編次

夜川の野航

者く主の頸と遡せ。ま七か通々恨。喻。玉物すとつど。大廈の
まよ倒んともるど。一本のよく柱。まよてあく。只。脇を噬。腸を
断。又せん術もうり。けど。かくてあぐまふら。ねば。ま七。忙。く。
ち。通。が。索。と。釋。捨。て。面。う。げ。よ。晚。き。國。乱。ま。そ。た。臣。見。ま。家。貪。て。
孝。子。出。す。七。不。育。の。身。と。以。君。家。の。難。よ。令。孤。情。せ。偏。よ。孤。憲。を
尼。ま。ん。と。欲。そ。れ。ど。り。虎。狼。途。よ。接。い。て。事。既。よ。こ。よ。な。ぐ。姉。山。あ。れ。
と。わ。か。く。ゆ。して。大。和。へ。赴。き。君。と。父。と。よ。事。の。執。と。告。め。某。と。速。よ。
穂。姫。よ。追。著。ま。り。て。冥。土。の。お。ん。供。つ。ま。う。ら。ん。と。り。ひ。の。果。ぞ。み。と。

肚へ突きとんとくる如を。お通へ急よ推角て。潜然と涙を落す。死人を
ろふへ理よ仰へんと。死へて忠義よ見る力のうゑ。つまこそ先へ死
たれ永くれ。死へて蓋みたるより。つまでもあらね姫の怨敵。陶
五郎より隼人に一刀怨をそめ後よ肚を切て死ぬれこそ。眞の
武士とんづべき。ひつをさく狼狽て。世の胡慮ようりゆふる。諫三が
半七も。有理と曉きて。又を納り。姉清翁の異見と道理ふ稱る。
今様ぐれ恨を堪忍びとれ。羞を忍び。灰を呑み死ふ瀕也。も
陶と厚年食と粗餐。もうして後よ殉死とも。實よられ遲まふとば。
あらじも某くよ國を。寛家や又油断をぐくべ。一圓隣園へ
身を避て。ちびくふ窮ふべ。姉山前へ直よ太初へ赴て。これとの
と紙告のり。同胞りう共よせんう。謀りぬよ御ふ。といふお通

うち兵院五郎侍もまづら。裏襄ふ沼喜の華を生へとれ。野伏ホ
推闇られて。括華徹笑尼よる達をり。かゝる彼尼刀称うち。
さをね胸くはく坐ら。今宵ハ槐姫の亡骸と。煙とす。ま
所を搔き骨を收め。あま紙携て。派衰へ赴き。彼尼刀称うち。
縁由を告げし。彼处へ墓を立た。どふす。あん身もおづ安藝岡
まで退き。尼刀称うちふ對面。又お花が往方をも索たず。彼
剛毅と參んで。一朝あへ謀り。早アて失ひゆる。叮嚀よいひ
諭せし。すこ宣ふ隨ひて。志を激く。撲する身の疼痛と刃傷く。
お通りう共納戸。姫の亡骸を扛出する。被あわし。草衣
りて鮮血よ塗まつ。その色と。やうえこら。頭顱ろりけ。バ
在り世の。ぬと。も定め難る。す。よ。淺すに。とりづ。づむわ。ば

夜の月はなく、星も。仰せんと、やうやくの日の暮るみを待て
亡骸と密すよ野外より出でて、遙よ一片の煙とす。送骨を壺よ
納めて、こきをぶち通が項よ無。がて同抱うち連とらて、安藝の
浪多へとそゆく。その夜通宵えりしう。福川のあるところ。
八千川の不とうまで來よたり。十七日の月もや頃て、夜曉ふ
近う。あふて夜とあしてこそ、彼川を渡。あとそ同抱うちせよ。
夏草をお布て、小雲時懇んとく。お途より跡を跟て來だん。
引剥紙とがばしくて、月額の跡長く延せ。あまうる暴雄木三人。
樹蔭より走り出。年三十餘男女の夜とあて跡を奪ひまし。
仇あるき情よ跡と闇。鞆の便私をうる當よ。大坂へとそゆくや
あん。疲労とくび行興りとも。馬なりとあ貸さきよ。酒價を

こせ。と教勅つ。前よ進みて太倭子衝と寄てす。七が胸前と
ひづと投す。左の拳と懷へて入きんとする外と拂ひ退く。矛を
起し。被て撃と投す。後ろる。両人の恩棍ども。大坂よ怒て
声をもかけど。刃と抜て砍んととく。す七筋と矛と豆と右石と
左石當う。いとも烈く。残ふ程よ投されしる太倭子。すくふ
矛と起して。二人が中よ押取巻。疲労と馳せよ砍よ。通へ
傷よぐるも附く。矛よ失あせどとて。恩棍をう抜つ。恩棍木が後方
す。声嘯て龜じろべ。女子すれども侮アリ。恩棍木ハ既よ持ふ
敵を受て。大刀とら忽地乱すよけとば。す七筋ひ十倍とて。端込
駒刀ふ中よ。賊が臍と三すあく。丁と切り。くも夕ふ左石ある。太
倭子が右の腕を砍てやとせぶ。仰て氣ふ倒す。お通へやとて取て押へ。



懷劍を取る。而して狗前ぐこと刺徹せば二人の惡棍や死く。聯て又を
門へ逃る。は七脫下と喘ぐぞ追てあく。その胸よお通ひ刃の血を
拭てぬま室へ納め立あがり。やよまセ。すがちのねもすひそ。やよまセ。と
呼うきて跡を慕う。されど又。すがゆじぬ水の隈河原ふ近き二枝
路を躊躇つゝも追轟こう。さる程よまセ。二人の惡棍と遂てここ
又六町みく。やうやく松田一うぶ。更よ舊の如へ立あがり。姊ち通ひ
何れへうやうたけん。まづくほべども無せど。ア、惡棍が主堂のこの如
様と居て。姉を探して去る。とサリ。よひりとろきのふ可なか。
あまうに索。川の上よ赴く。向の岸ふ繫つ。叔の二艘あり
と。もしも今又金一艘あり。原本。又。姉の川と法をひけん
と。遠く水際よまで。船(内)と舟をまじ。船橋よひて。縛られ
人あり。夜川の水煙みて。纏へ定くよんえ。弓を。腰鑓と。手
の絆被られて。ひよ背へ。驚き。これに。姉みて在り。どうが
更よ同諸ろん。ばど。縛て。縛の索を解捨。猿籠を外。しめて
その顔を。よき。ある。妻のか。花
みて。あしづぶ。うるひふ。と。すら。翠。すう。これ。勦。ア。且。その。左を
向。お。お。お。と。うら。注。て。主の。袂。と。顔。す。が。當。度。よ。な。せ。ど。う
タ。且。と。候。を。拭。ひ。主の。為。主の。為。ふ。一。と。び。捨。る。身。ふ。の。主。ば
飽で別。また。やく。の。隠。あ。脚。憑。と。と。うち。歎。た。お。よ
お。ひ。ま。や。夜。川。の。ね。と。り。絆。共。よ。繫。だ。あ。る。端。ま。の。縄。竭。ど。く。そ
達。と。お。さ。も。一。昨。の。黄。脣。ふ。小。保。の。縣。正。の。使。者。こ。と。そ。あ。る。惡。棍
等。こ。と。と。彼。剣。ね。て。ゆ。で。お。手。を。小。屋。へ。昇。い。う。そ。の。を。序。こ。と。ま。

花街へ賣ふやあんぐらん。と推量せば、のむもちぬごと。彼宝刀ア
身を代て陶が妾とするが、生てゆんと、せりへばうしゆゆやお女
とすんすん和のうへうる私事ア。只速よ自害ア。オと繫くせんの
と。なぐくよどひ定め。つづくがもうりやけ。風流士の宝刀の
とも。虚言ありとん推てある。これもすれくわり。良人の多く
ひとかくとみ。かきのぬさでも、経て出で。ごまとうのとく良人よ告。その
後よ死うべ死てん。あうそく。と忽地ようへうつ。のふの瞼者におみ
ゆき。滑び出間道ようまく宿よ。不覺よ路よ憲ひつ。水上のくくへ
ゆのシトセ。其外ともちうね山路よ入。物聞んすも人あへ逢ざま
ひぬみて夜をあじ。又ひぬみて日を暮。幸して里へ生。やこの夕へ
来。よひとがろくに。倭子ども。二三人きり生て。矢庵よつらによ
猿轡と術つ。この船の中ふ繩を置。跡よも又一人。うたものい
くぞ。それより男の假もあり。侮アと考へはる。と一人がつづく所
ぬ。身よ。身を改て待て。かくてさん身が。彼惡棍木と鐵ひよを
うきよえり。とつども。向遠け。何人か死ち。わいられね
ふ。ひき。故ひ久求ん。うたきよるめの水と陸。藻よ。危虫の
つまうらと青よのままで待り。とひうけてスヨと注が。七鏡せ
嘆息して。やをす背をうね様。別具へ一時されども。さん身が。往方をい
りとす。たゞ。逢すく。とすのうち。又一層の禍あり。と。安慶の
宿。と夜とて。赴く途をたどる。や身が先途を取す。
夜の中の耽び。す。何ううか。彼件のうども。彼惡棍
そ。が詐詭の計ふ。あじしへ。風流士の宝刀をどうも復そだ剥そ

夜天神川の河口ナカで彼老翁又龍王出され。律既ニ難儀不
及び。わざひゆうけど姫ニ被也。槐姫ニ環會ありて。やく宿所へ
誘引ある程。よろしく訴へあつて。あく姫を殺まつて。かれべ一日。う
とも。存命べき事ふあづ。肚を切て姫君の冥士の御道せんおと。
ういが。是も姫ニ譲られて。更ニ仇人と養へ為す。且く彼女を退く。
姫。りう共。沿きの括華庵へとそ赴く。下りをつゝ簡様と。
お通が圓樹を天神川へ砍流せし。敗戦全敗。陶五郎が。厚木金
隼人が姫のちん頸を刎つ。括華庵の兩比丘尼。外母電を祀る。
おとが妹の夏山。此彼打ちもろくお諸事。お花火。行はと
こ至死。ちて。或ハ斬られた。或モ食ふ。或ハ恨み。或ハ怒。渡般を漫び
如く。在ぬの月。もれが焉。更ニえとどり。ひふ御子。且く。そ七。

忽地陸の河口ナカ。今既にお花又環會とのども。嚮よ草城木を
追ふ。よ。妬の往方を失ふ。お花へ立て。彼老翁とよさう。
女子の川を渡しを。お見ざり。と向ばお花へ立ち点。理宣。され
如く。嚮。小ちん身。が悪棍木を追蒐て。西の河口を去。もひ一時。改め
残。ア。る婦。女子。お鎮。お声。とよく立て。長追。ひひそ。とも。ぐぐ。眼
うけて立在。るが。遂。よ左。ひふ。繫。だ。る。野航。おうち。まつ。お。ひ。ま。が
棹。を。掲。つ。向。の。岸。への。ぼ。みた。原本。姫。お前。よ。そ。う。タ。り。とい。ふ。を
す。七。呪。お。果。ど。あ。る。と。へ。お。安。い。ア。れ。も。向。私。と。著。て。よ。姫。お
お。通。著。ん。と。そ。邊。く。缆。を。解。捨。て。私。を。河。中。へ。漕。牛。下。り。滑。れ。ア
ひ。の。癖。者。稚。萩。の。中。より。頭。生。引。捲。る。種。島。の。毛。猿。と。そ。
る。舟。河。中。る。私。を。吊。す。火。蓋。と。切。て。撞。と。叢。を。よ。す。ま。七。そ。や。棹。を

抱て縫小伏ふけまへ丸ハ頂の上をもてぬ。へ牙ふ恙り。麻者へおの
形勢ふ乞愾て又遠く丸を糞再び粗魯とむと。歎を忍ば
向へ著て。間遙よ遠離き。糞者大至ふ焦燥て多疏を憂給
投捨続て血後えと。私を索て河流へ足を走りゆく。傷の
芦薪とさくと推ひたて。頭毛生ずへこまゆ。又糞者とおもへて。
毛拭よ面と裏を肩ふ受うる金瘡と布りて巻て頸よ糞。毛瘡
ふ屋せぬ面碧河原をまよ糞者と。つぐと透見て全人等と呼び
鳴る。声り絶共よ野鳥森とまよふ。朝風よ夏と寒と八千川の
あとう音もかくれ時々や旅客のひすいと左右をもう
き。立つて紙を手振り。此彼あべ密語るべし。

合歡の花桶

天文二十一年夏六月廿日安藝國高官郡沼ノ御の下
る。彼此人門を構え。構を續び。括革比丘尼が草庵。嚴守の兵材
天を勧請して三日三夜の法筵を開いた。左をなづねば。
今茲ハ五月の下である。終て一滴も雨ふじ。草木へ枯槁。金石へ
流禍。行人途を去り。民の數を大にさる。經べ。兩乞の祈禱と
せんと。彼此の里人。女僧が庵より天女を祀し。或ひ五色の懸を達
或ひ缶と吹鼓を鳴らしけよ。三月の結願と。集落の老弱男女。
咸養室は集会所。隊の長持の附木。也。織本綿の傍。俗良も
麻上下をさぶるもの。曉鼻禪のとある裸體。葛の袴穿ぐるも
あり。囉齋青道の木へ。白榜の单衣。腰衣をするもの。ど
う。置く。妻を一堂寄す。例の構裏へ。六疊の房へ集まつ。浦
味ふ
べ

三原の二院へ客殿へ因居り。西条の新構えと柿の水引み
隔て居させ。飯後ろかんきく元へ。すゞ酒を飲まぬや。布施と
大人小兒をひび。百文つ。膳牌と即引がえ。平皿ハ茄子ふ油揚の
室齋。雜混ミ汁。猪口葉胡蘿蔔のひに。お喬の物へ。胡丸の輪
切。さて飯の食放顎。僅殘百文の布施物で。の如くの齋不
つれ如是の法命。よ達ひ。獲がゑ甘兩を獲くらん。がぢう廉さ
りのく。奉道場のモ院すれバ。奥ハ殊さらつ房もあら社ど。
各住行儀第一。神妙よ圓鏡。百味の供物神酒。うんどす。
流經果て割賦と。履物へ牌著。置所を忘れ。預物を
いき處ぞ。うね懷中物の用。身。奥くと。声す。立と。嗤けば
目口へ。纏且入る。汗も下りて。拭ひあひ。施主も道者もつれ立く。
客殿隣」と。糞入り。その日も午の貝吹て。集落やすやす度詫
久。紛々入る道俗二人。奥のかづく。滑び生同と同と往て。兵衣
は。端ちくあくと縁ふ立在すが。祖翁。奥の為傍よ。こうせつと
見す。や。正くこの途。未さらん。と。ま。す七ぶ。新。ふる。不審。
少。圓樹へすをれて。すよ全以青方。と。拵。夢て。奥と。えく。額と
あくと。声と。不そあ。口。も。まく。のど。も。足弱と。伴ふ。されば。す。七
後。も。や。あけん。道。も。ぐら。も。い。つ。如。く。い。ぬ。十六。月。小。夜。丈。て。づれ
う。彼。ま。七。と。天。竹。川。の。母。と。人。寵。に。出。す。あ。め。く。不。罵。く。と。飽。す。で。這。奴。ふ
ら。づ。て。や。ひ。も。う。け。ぬ。女。の。す。よ。觸。と。砍。割。き。て。河。あ。不。滾。着。く。と。
山。川。の。早。拂。え。推。流。ま。れ。浮。ぬ。沈。ぬ。幸。く。して。沢。川。へ。流。き。生。彼。奴。の

黒人ホヌ助あづられする。そのうなれ矢やまけん物ひとうがえ
移ど流石よ金を運竭されば忽地ふ甦生て。元力へと下めふ異みだ。
かく医師ふ瘡口を縫し。僅ふ一ヶ月保養して。十八日の亭午水上へ
立寄りて。すぢるの駄向べ。きりのあり。這奴へその夜す。櫻姫と宿
所へ使ひよふ。車忽地よ渡骨覗て。姫と四五六の隼人よ聲。世を
飛ひやおひけん。奴のお通りよ華清のかえ赴くを。の瞳よ
起ひやとりく。さて全員と向ひよ。彼の陶殿ふ疑え。隼人よ聞
られよと。喰車を毎よ奉意遅ぞ。腹のようものもみんば。やぞ
まちが跡を追う。捷徑と通脣をうて。這奴ホトキ先へ捨生八千川
の風とくさる。範父鮎太。不伏彦とゆき。二人の野がをを相譲て。
まセお通と待ねどよ。範父あいひうひう。まく脣くずす
とれが。これの底氣味。まくうりう。稚萩の中ふ縣ひく。始終面
ともほ出さだ。這奴ホガ川をほと歟。阿容こと眺め居よに。汝も
又まセを追慕来て。私へを猿を打うけよれど。間違けれど當らぬ。
やナで間のこころわよ。ウと吹ぐ痴と求ん。這奴ホガ往方へ
定ふまうつ。一日これと走りして。追撃ふあくことあじ。どうひくが。
汝をが呼び戻された。あるにいとこうなぐとへ假る。女すとお通と
やうりうとおひふ渠へコク。四五六よ密語て。撞木町へおとめりと。
泥引出くらむお花うり。被御妻ひづけて脱出されん。汝のこな
の題をあざめとひそめに駄向べ。全員笑て眉根とよせ。その夜す
お花がよと。四五六ふ任。されば。吾解へ絶て。こよをまよだ。天神川の
不とうみて。げん牙の聲をもひぬ。とひくが。次の日氷上乃宿所へ

りあれて。ま七が通と教取さんとある。お陶五郎の末ぢせり。ま
教べき仇人をぬけ教び。これへ却陶殿ふ詣されて。四五六の隼人
關より富田の稚山へ休る。途どう竊ふ取てく。ま七等が善隠の
かく。赴くより伏せ入る。夜と日ふ既て。這奴ホと追蒐。八千川の辺
まで。その背教へえよれど。あ一條を闇へれべ。亦被教へも教漏し
たり。ふくらへあくらん。とぞひふ。眎眼。とぞやあく。途とうえて逃
ふる。途中すこ教び死りの。あまろふ。深く慮りて。追失ひ。遣恨
され。と後悔。そればうち笑ひ。あうちへ理りまねど。途とうえて
あの夕。あるは。西条よ。ま七。里人。宿多の括華庵。を。併れ
ど。聞ふ。紙。竊。吹。する。と。あれば。十。ふ九。つ。な。べ。く。彼。お通。奴。
の。代。へ。あ。た。け。ん。され。の。這。奴。が。面。を。認。と。ど。奥。る。群。集。の。中。み。や
在。る。全。み。汝。へ。ま。ト。ざ。る。故。と。聞。べ。竊。を。さ。一。陰。お。通。へ。た。や。來。り
けん。嚮。よ。奥。み。そ。え。よ。れ。ど。も。這。奴。不。あ。て。ん。ま。七。を。教。ん。び。と。れ。乃
妨。ふ。そ。ん。と。そ。く。て。群。集。よ。紛。き。入。る。そ。の。そ。う。へ。奥。く。や。く。ど。只。ち。う
り。と。う。れ。る。ま。七。が。往。方。を。そ。そ。と。ひ。ひ。う。外。面。眺。呈。且。ば。同。樹。も。參
伸。あ。う。て。忽。だ。不。指。示。し。向。ひ。く。來。る。ま。七。と。後。方。る。そ。へ。お。見。し。
夜。の。き。こ。そ。定。う。ふ。え。よ。緑。芭。蕉。室。ふ。認。あ。う。と。づ。べ。全。み。雀。躍。し。そ
現。を。被。へ。ま。七。う。此。度。ひ。う。で。逃。と。ぐ。と。卷。を。捺。ま。同。樹。の。騒。が。だ。
遍。て。の。事。を。失。り。の。ぞ。汝。へ。ま。づ。被。教。る。芭。蕉。の。背。よ。歌。を。教。し。て。
且。く。便。宣。を。寢。く。じ。つ。き。へ。又。蓑。子。の。下。ふ。扇。く。居。て。汝。が。ま。七。を。教
ふ。と。れ。這。出。て。矢。鹿。よ。お。花。を。扛。攫。つ。き。う。そ。ん。摶。り。の。あ。ま。よ。れ。
汝。へ。ま。七。ふ。教。散。し。そ。ち。通。と。櫻。ひ。こ。れ。は。繕。て。ま。う。去。れ。

卷之三

卷之三

すや愁を復したと。玉を取る袖を持まうば。と譲りあひま
祖と孫勇もれか。義と愁か。立可うれする意の隣入全み刀を
接て。ひまの行を丁と切取り。袖を表へを准徳の行也。アモノとうち
揮つ。下にまどれて接え。あくべ五縫ハ芭蕉の蔭よ。身と隠て這奴を
待てん。そく滑びゆき。とひそがせども肩騒がむ。早りて身失せ
八千川あて身の院を放てられしるエモられべ。またも又油断ませト。
ひ役のゆりや黒て。と彼達を粗魯。遍みて。と足を立テ身失せ
這入る床の下。袖の糞を身不端であるや。と土へをう葉。耳みや
やう蜘蛛網を搔拂ひて釋き。やり禮よまセミ婦も。身と
こまぐふゆく物の。たゞ衣裳するぬこの華。遙は紫乃戸をうち
屋を。ごさりけ。と身ふぞ。日新よあり。身を身すく。この春もん
身りう共よづ。扁うたゞ衣裳すとも。其外ともあれども修す。
訪りでる草菴。今さうらしくば索とが。菴あわあとがるふ。ま
往ふ。ああとがじ。加え面新の。つぞう裏毛とそ。それとま
あひうげざれ。づれあがら思ひ。こまゆま婦が腹毛。危ふ
あびき祥るうりん。おん身ひづく疲勞。今身たや平安し。
といひ慰まば嘆息。経て久た叙母。お前と妹ふあへ喜び
けきと袖へす。乾ぬ濡衣の。また身を雪るよとがも。被此よ
身をあひく袖て。請來よう。とおさん。とおへ面多く修るか。と
ひまも嘆息。つまへおん身ふ3倍て。槐姫を寛家よ繋れ姉の
往方を失へ。彼も此も面がせ。とぞうと止へぎたあらば。
外母の女僧ふ對面して。娘のやくへを向定め。志と演て後よちの

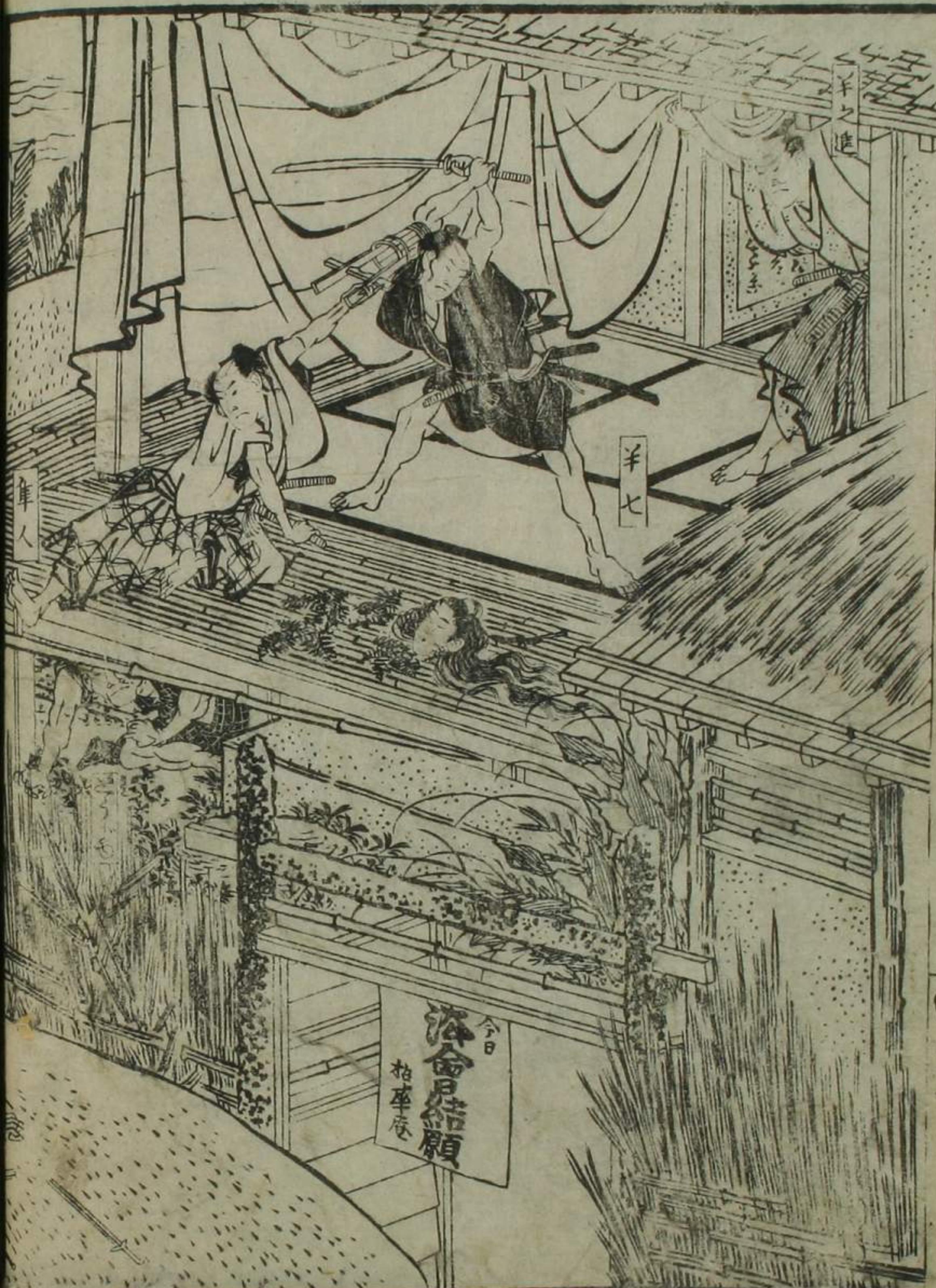
草の戸と死所と覺放の豫てあるみと。ひくも又嗟嘆す。
お花の頃よ酸鼻。ひうたと宣ふる。おもむき時の運。おん身がた
おのびつりく。えどく定めても。定くらむ
おのびつりく。えどく定めても。定くらむ
衰別離苦。一度別まそ又達て。別きの後へつらう。どひうそ
口隠まぶ。まざ声を歎く。すゑの歎きは女子の愚癡をや紫門ふ
事うじふ。泣がねあ不そ入うゆ。と漁の支を新護て。薦なくも
ゆめへとば。且く立在ま婦が後方ふ。急地夥の人。着たる紙。ゆう
あくえくとばわゆどをあれ。厚食隼人腹巻ふ野袴穿て。行
装いめ。赤銅造の両刀と長サト來ひけらし。手袋を桶引提
て。従者と異ねて。三掉の唐櫃を打撗し。柴門ちくくも。ゆう
はせこゑを信と見て。這奴へ正しく隼人ゆう。姫君の讐敵。か
孤女空へらだ。おぬみて聲をとば。姫と外母にへて。みやけ
み姫の亡灵の仇人と道すれまふを。あす喜」と。笠搔と。う
且く天代と礼拜して。刀の鞘と口潤せ。お花の袂ふ勢著。う
ぞうの猛くとも。彼畜せ仇人へ。勇勢。牛角の勝負へ。勢と。ひ
うべ。瀬じて假寔と窺ひ。お隨ふ聲てこそ。眞の勝ふふ
だけ。と諫き。ばうち点改。おん身が異見。その利あり。お戸乃
簷よ立。従者ホグ退くと。遣廻して。隼人を殺す。さる
と。おま帰立。わづれ。推べ忽然と。うらくと。零條す。うらくと。諸
お戸の。着度よ。ほきて。窓ひたり。する程よ。厚食隼人へ。庭門
壁」と。唐櫃と。括華菴の緑あよ。杠入ます。ぞ門と。ゆふ

私車二人。うち絶びて声とす。主菴主の比丘尼ふねまうさん。
タメの法会の施事とて。陶殿の清内ある。厚金華人を善歎。
みづから外宿して。出迎すと。呼まども。奥を散動く人の聲。
門へあぐり。蟬の声。絶えぞあぐり。夜もせど。もよよく。呼まく。
拈華尼へ微笑とおぞ忙しく。縁頬まで生迎へ。これらひもくりぬ。
里へゆるが私の宿院みて。辨財天を勧請し。只假初ふ集会する
の意に従ふ。改の後の屋の晴内の刀林原。清來りよこそ幸あれ。さ
こうと。諸それべ厚金華人へ懇意と。上坐とうらわぐ。
や女僧とも。縱里人。ホガ。私の祈禱をせよ。衆人知観一一致にて。
聞く法會の殊更。天女も感應あり。づれ。昨日富國寺。
このより以て。嘆賞のあす。法會の料を助ん爲よ。直子不
みづから。彼とよ。三種の唐櫃。自承五百袋。
青緋百貫文。まと。紙布。施を。又。祝勢。一桶の花也。
今と盛の合歡の花。槐樹と承元。がくそ。ごまく。天女不献アレ。そ
陶殿の武運長え。がくふ。みゆ。幸わせて。富貴延満如意
言祥と。叮寧。宣入。赴く。うなづく。限ゆ。盛の合歡木。花と肩拂と
うち微笑。宣入。赴く。うなづく。限ゆ。盛の合歡木。花と肩拂と
名つけ。と。因。舍人。取りて。かづきの花と。喚。做し。榮乃
狀。ハ穗ふ。れど。花。ハ殊更。愛ら。や。天女。み。肩拂の。名も
御。うなづく。花。うなづく。代。す。よく。美。二人の。女僧。小顎。傾け。あ
む。二。厚金華人。うち。点。改。一。瓶。の。花。う。。の。涼。た。一。菴
且く。う。と。汗。と。納。ま。と。徒。者。ホ。外。面。罷。り。出。樹。蔭。り。と。あ。

古本名言考

ט

さく涼めといひしげ。とくもが徒者のお戸を出で樹下陰にありひ
かひひふ想入狂よ。両女僧の客殿へ設の席と修理にて。やぞ
奥へぞ入よたり。おこそうけとどす七ハ。お戸の蔭う。頭を生
きる。刀の反をうちかゝと。縁頬ふをのぼう。五達の罪人厚く余年人
ば七を認まうや。今こそ復を姫の雄云。刃を受よと罵りて刀を
抜て丁と砍りぬ。扇を以受とふめすよ待もぞつみりあく。とつ
セものほど刃を引て遠間もあく聲て驚る。壯士の大刀風と烈く。
あくらうれて厚く余へ花桶取て受み。内より驚く女の頬。ま
まとくまくアソ。らしくりづかと疑ひ惑ひて。うれど尻尾は撲地と
ゆく。洁如小全み。竹檢をう持て。芭蕉の蔭う。突て生一日
暮んとろひ定め。亦根が長男刀治す。そもそも脱毛仇人の
半隻。全みがむ料理の。巻刺み。とくまをと。巻ひ懸らんと
まればわ戸の簷う。も花の吐嗟と走り。虫身と肩みて全みを
遠り。蜀と。物ともせど。又若れ女子の助大刀。汝ゆ丈の相伴
さんと。牛檢と。一揮駆逐て。も花の胸筋。背へりて。ぐまと刺。槍
忽地。獲毀とれ。も花が姿へ煙の。威て跡あく。りく。う
さうりふ。猛き全みも。忙めとて。前後を失ひ。これふもあとでつ
ゆう。また。やうの形勢ふ。やすらく。奇恵のちむひと。どうな
が。厚木。草人。勢する花桶。滾出する女の首筋。も花が
全みと。遼り。蜀と。牛檢よ。徳とくる。も花が姿へ消失て。全みも。又
放ふせ。彼を。あひ此を。ふ。八千川の野航。も。やくつる。隈会



うれやうで伴ひ来る。吾妹子へせふすに魏の。かふ顕おほあと「うれやう
それ歎うれあふぬ。怪あやと。うらぶと小膝こひざとす。刃かと韓まよ納なても。
す。あふす。放狗ほがの雲も。疑念ぎねんへ更さらふと互たがはう。當下とうか隼人はやぶへ
近ちか居寄ゐよ。扇おひぎを笏えどりうる。よ赤根生あかね銀放ぎんとあふせねば。
こそみ隼人はやぶを憎にくとも。反逆へんやく人ひとともうひけめ。今いまとそ諦あきらと機密きみの
謀略ぼうりゃく。うらぶと定さだて吹ふきり。抑おの某もし又二郎ふたろう太支おおしりう共ともふ。槐かい姫ひめゆ
冊じつきあり。周まわ防まか山口おかへ赴むかそ。兩三年りょうさんねんと遙とおる。大内おおうち殿どのの驕奢きょうしや
候ま。あらわす。同ひとと教おしふと車くるまのとある。老臣ろうじん陶とう晴賢せいげん、
黨とうと樹比周じゆひしゅうと。主ぬしと凌さわぐ。權ごんと賣うる。謀反ぼうはんの萌頭めうとうと。弓ゆみが又
友春ゆうしんと。晴賢せいげんが叛はんんと爲ある。よひとそひく勞らうせ
く。持病じびの積聚せきよを遍まへて。減へえ茶ぢ餌めしもそのうひるい。今いまかうと
ろひてや。某もしを枕まくら方ほうふ振ふり。陶とうが通とお謀ぼう免めんきよ見みり。り。
不虞ふよのあは。槐かい姫ひめの。極きわめて危き。もううど。陶とうが阿黨あとうの
佞人ねいじん内外うちとくわいふ充満あふされば。汝孤獨おのぞくの牙はを以もつ。明白めいめいふこれと禦ご。
却がく陶とう小教こきょうき。う。う。が是これ姫君ひめぎみの。あんあんをう。悲かなひう。ど。これ
死死。大内家おおうちけへ亂まん。汝汝おのの假うそふ淫酒いんしゅよ飲の。放蕩ほうとう無賴むらいと
人ひとふたりのせ。ころ地ぢとをや。逐電よせん。京攝けいせつの間まふ身みを階はし。時とき
平城へいじやうと閨防くわいぼうの爲ため停ていを以もつ定さだめ。晴賢せいげん謀ぼう免めんせうと吹ふき。一一番いちばん
をう。りあき。せんと。ま。支著しそう。姫君ひめぎみの先途せんとを救すくひ。事ことと難なん儀ぎ。小脇こわき。密ひそ
陶とう五郎ごらう隆春りゆうしんふ底そこ意おもを告こ。彼かれ人の力を備そなへ。槐かい姫ひめを救すくひ。よ
兼あわて。赤根蠟松あかねのうまつの両老りょうろうと示し。一示し。徳井家とくいの援兵えん年とし
清きよ。う。うちやう。且また大内家おおうちけの舊好きゅうを云いひ。西國せいこくの武士士を相譚あいだん。晴賢せいげんとす。

威士。陶九郎。隆春。主命。股。訴。晴賢。又。之。也。也。

その。心。氣。大。食。り。し。を。ま。く。實。又。ま。そ。を。が。弱。冠。の。と。な。よ。仰。よ。

竊。小。汝。と。力。を。戮。そ。姫。を。放。ひ。を。も。ん。り。の。く。彼。壯。校。の。三。これら。の。

多。死。胸。ふ。私。て。口。が。遺。言。を。忘。く。と。る。人。れ。り。利。よ。我。心。い。勢。不。

つ。れ。一。食。た。ぐ。も。不。忠。の。志。と。挾。ば。本。素。永。劫。親。子。ふ。あ。ら。ぞ。

と。密。や。う。小。説。諭。一。そ。の。夜。空。く。う。し。く。ぶ。某。失。怙。の。哀。み。壇。ぞ。

と。く。ど。も。君。父。の。為。ふ。錢。を。以。へ。ど。り。程。も。あ。く。富。酒。の。為。ふ。武。具。

衣。服。を。活。却。飽。ま。で。人。よ。疎。す。そ。遠。よ。山。口。を。迷。電。流。浪。て。浪。速。

轍。走。き。身。ひ。と。う。棒。も。死。ふ。藏。の。四。五。六。と。改。名。一。平。城。の。青。銀。岡。

國。の。形。勢。を。も。う。ん。為。ふ。一。外。よ。宿。と。古。ど。一。昨。年。の。參。復。連。事。て。

去。年。の。春。才。で。大。相。よ。あ。う。あ。う。ふ。左。手。を。続。井。殿。に。望。め。又。不。會。ト。

と。す。と。す。つ。き。傳。吹。て。つ。ら。く。も。不。ふ。じ。に。陰。陽。師。村。上。親。實。が

ゆ。ひ。て。茶。谷。山。み。る。本。精。塲。を。獲。一。風。流。士。の。宝。刀。を。や。う。出。ま。せ。ん。

り。ひ。つ。ま。す。又。二。郎。太。ま。が。物。諸。も。そ。咬。よ。る。と。も。あ。る。力。の。刃。づ。く。ま。れ。ば

続。井。殿。と。う。う。武。勇。小。榜。り。く。ぞ。彼。宝。刀。を。出。づ。く。禍。主。從。の

え。あ。や。石。ん。こ。う。つ。ふ。せ。ん。と。そ。頸。ふ。憂。ひ。り。ふ。わ。く。ら。敗。戦。の。全。參。

櫟。本。の。松。原。み。そ。山。邊。の。峯。ま。く。そ。巣。ん。と。そ。却。養。母。の。自。教。せ。ー。と

ある。そ。の。外。か。れ。あ。り。遂。よ。全。參。を。そ。の。じ。て。本。精。塲。を。掘。崩。し。

風。流。士。の。宝。刀。を。代。所。よ。埋。め。そ。続。井。殿。主。從。の。矛。ふ。か。る。と。そ。禍。を

禊。除。ん。と。謀。じ。ふ。彼。大。刀。忽。然。空。中。ふ。閃。き。升。り。西。と。投。く。矛。

き。じ。ぐ。あ。ゆ。く。云。安。う。と。だ。全。參。ま。よ。誘。引。立。て。や。ぐ。周。防。國。へ。赴。き。

あ。び。く。よ。周。流。士。の。宝。刀。の。往。方。と。索。ま。が。彼。宝。刀。の。故。ふ。事。起。そ。て。

大内殿主従の間快く。晴賢俄頃小謀反して義隆自殺し
もひぬ。こゝろ又彼宝刀の掌よりばへ木谷る。木精の餘怨を
まふ精どもその禍の移りや來ケン。あゝゞガ槐姫の人のとも危うき事
あて姫君のあん従方を索あゆじ。亡父が疏忠を空せよと夙より
夜ふらゝと絶て姫君のむん在所をもとめ。かりに程ふいぬ十六日。刀治
同樹が欲心ふ。全みふ説示し。天神川の上まで西邊と移せんとする。
剝げ辺の妻女をば。こゝと全祭小詐詭取し。樺木町へねてゆけ。と
ひゞぐ。これ又陽あへこゝろすと。全みふす底意をもとせば。
陰よち花を化所へ伴ひ直まよ天神川の上へ走りゆた。車乃
爲体を張へば。西邊の姫が通刀称。同樹を川へ破壊して西邊を救ひ。
同胞さよ再会して槐姫を薄うわよし水之上へ転んとすと
竊笑ふ。全みも又こゝよ身うちて矢巣ふ西邊を警ひんと
せ。アゲ。口見又全みを助るむりらへそ。却こゝとを遮止め。西邊へ
さらりと槐姫と故り。延一あゆせられど。こゝのうそゆくと
風吹きて。次の日のあらめのまゝ。がまび姫のむん令。その危う
風氣の燈ふ他より。りこの時ふ。隆春を助けるもがり。西
姫君を敵ひ。ひうわよもぐま。とありひへく。やがて山口へ走り
やなべ。竊ふ陶五郎。隆春ふ對面して。心中の機密を告
る。隆春笑て眉を顰め。けしもとやうのうの笑へく。
云若。ちりづり。あくれども。槐姫へ刀治が宿すよ齧びと
もるよ。人有て向よ養又晴賢ふ告をきべん。常の計策を
敵ひ。あくと難く。あくれども。年未深窓の裏よ冊く

まひる。徳姫ふすませば男のうりづが養父とのべどり。
面新定ふみへさとて御うらば年深骨相姫子ふねよる
女子とりて。かん家代アふすりあり。山邊苦肉乃汁を行ひ
萬ふ一娘君代被ひ進ふともむとるみん。徳姫君代ら
もる。女子へあくやと聞きテグ。足忽だふちりよ。徳ふ國
樹と欺まそ。化所へ潛居らじ。す。す。七女房おえき。年
常といひ面新といひ。がきを徳姫。まつとひこらゆ。す。確
久疑べ。特ふ彼女す。嫁支曾太郎の女見す。づが馬み
外姪。ま。ま。七え。東忠孝の杜伎。ま。事急。す。ま。七
ふ。若す。ふ。う。び。如。此。ま。ふ。謀。と。そ。通。不。隆。春。ふ。謀。一。あ
ま。い。麻。り。て。あ。り。ふ。す。と。ち。花。女。不。告。う。び。者。と。え。て。勇。む。郎。女。の
る。う。く。ふ。う。ち。ゆ。騒。う。ど。風流士の宝刀のあふ。寛家の側室
と。う。り。ご。ふ。も。主とまの為。ふ。厭。り。ど。ま。う。り。ま。と。改。服。君。乃。
先達不代りを。す。て。良。生。の。身。の。福。ひ。後。く。わ。り。わ。ざ。れ。ふ。お。す。
幸。ひ。ま。侍。と。ば。ば。の。中。居。ふ。て。や。く。り。く。罪。被。く。も。懃。ふ。
ま。と。出。め。一。つ。う。が。失。ち。ひ。と。れ。か。ま。瀉。衣。の。乾。す。一。も
う。う。し。不。物。ふ。托。一。玉。枕。脚。布。の。お。ん。り。と。情。之。ぬ。く。と。が。
助。く。え。下。助。け。ら。ま。一。恩。ふ。報。す。ま。こ。の。時。う。り。今。一。篇。う
所。天。の。面。影。こ。す。く。母。一。け。き。ど。愁。ふ。そ。う。く。れ。ば。名。豫。も
り。と。惜。か。絶。べ。お。り。お。ぎ。ち。の。せ。ん。假。の。宿。承。き。寢。土。不
婿。き。の。契。と。た。づ。く。す。と。言。傳。て。ま。と。い。ひ。う。け。て。後。い。い
残。を。隠。口。の。あ。う。る。別。ま。と。お。ひ。す。が。これ。も。涙。よ。れ。

く見るが、うとうとて、腰を懶ふ。まゆ毎十分ふ諂うえ
爲。門邊をば村長辞めよせよ。づきへ竊みお花をねど。
背門口より潜び入る。槐姫とば何とる。納戸より牛
車うて。姫の衣裳をもとよ被せ。お花が衣と姫不被せ。うづ
姫君とば准徳の竹輿ふ抜舞し。そこお花を納戸り。押入の
戸棚ふ縁下。密やふ人をつけて。槐姫とば化面延しこれ。
陶五郎ふ喉までとれ。外間より走りあつ。すぐ納戸へ跳ひ。
雄うる晴賢も経て友善と疑ひ。スル邊同胞と追撃せど。うづ
幸うて槐姫の心令悪ろくし。は邊の舍井と妻女の功なり。
已見その誠心と感するの至り。且この娘ハ園名花夏山両比丘尼乃。

草菴あるは。槐姫の宣ふうら。義女お花が首級を贈りて。有縁の
道をふ葬らせ。又姫君の夫人を委ね。事の起と告ん爲。法會の能
もふ假託て。夜を日ふ続く。走れど。お花が首級を贈りて。有縁の
愛情の羈ふ牽れて。志がそのまよ賣縁更ふまの危難を救ふ烈女
お花が身後の貞操面赤ふ見て。おもじく感佩。嗚呼奇るうむ。奇るう
み。と只管ふ歎賞し。一五一十を説ほせば。奥ふ忍地よりと泣。女子の声ふ
猿華微笑尼姫のか通じ。或へ飲び。或へ食ふ。原末お花へ槐姫の心令ふ代り
けり。さてこそまじがけ名と呼ぶ貞操公列。それとあまび八千川よ。傳ひ
まの世より此處のすどひ生て。婿までの別れ惜放不復。天晴ゆ厚食ぬ。
辺りのうへせば。姫君ひで。心令ふ。さるうても。古人二郎大丈友春ぬし。

未然を免せ。石巻の背。凡慮の至ふ。あよむ。才淺けよ。ばらひゆうぐ。
辺を姫の仇にして。駕籠にてるす。七ハ恨とく。種く。年よりと額と著
疾と。かくと。杖えが。下と。うど。今更よ。生るが。どに。妻の首ふ。哀傷。ここそと
厚き糸へ。件の首級。と。うわげて。花桶の内。みきめ。天女を祀る法場。ふ。體
體の行繕いと懲。菴主の女婿。み。隣属。と。法慈果て葬り。と。ひく。邊
せば。ま。七ハ花桶と。ぬ。ひ。受。椿樹。み。い。合歡の花。ね。づ。て。学敏。二妻の
夜墓。ハ。則。む。向の花桶。嚮ふ。こ。す。あ。う。と。た。ワ。と。諭。云。祭の端。み。む。
定めか。死。へ。哀別離苦。一。を。う。れて。又。あ。て。つ。れ。の。後。へ。り。う。き。ん。と。云。ふ。そ
げふ。卿。く。死。女子の愚癡。との。も。ひ。ひ。ひ。と。て。比。け。と。云。ふ。と。や
恨。こ。け。ん。ぢ。べ。不。便。の。終。焉。う。ね。と。ス。ア。ツ。ヒ。と。草。環。の。い。と。衰。ひ。や
す。う。鼻。う。ら。か。ま。て。厚。糸。糸。あ。く。ら。う。き。う。う。さ。う。え。

村田

